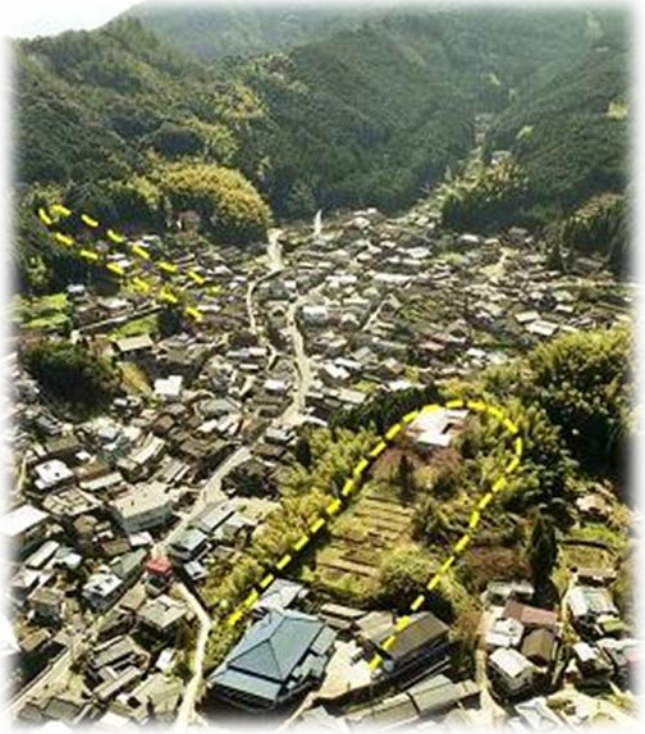
# 陶芸の里の文化と自然をかんがえる

## ～波佐見陶芸の里・文化と自然と景観ワークショップ～



**第１日目：平成２５年４月１２日(金)**

**中尾山路地裏散策ツアー～意見交換会**

**～みんなで歩いて語ろう～ﾌｨｰﾙﾄﾞ ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ**

**時　間：13:30～17:00　　参加費：¥200-**

**※　参加希望者は事前申込み要→事務局まで**

**第２日目：平成２５年４月１３日(土)**

**波佐見・文化と自然ワークショップ**

**時　間：9:30～12:30　　参加費：無料**

**場所：旧波佐見中央小学校講堂**

**問い合わせ先：事務局　田﨑（0956-85-2639）**

**Mail：tkworld.mm@coast.ocn.ne.jp**

**■主　催　波佐見文化と自然・ワークショップ実行委員会**
**波佐見講堂ファンクラブ、波佐見・緑と水を考える会**

**■後　援　波佐見町、波佐見町教育委員会（予定）**
**各種学会、九州支部（予定）**

■開催趣旨

長崎県東彼杵郡波佐見町は文化と自然のまちである。16世紀末から陶磁器の里としてしだいに頭角を現し、17世紀後半に磁器生産において隆盛を極め、いまでも全国の和食器の出荷額が13%に上る、我が国有数のやきもののまちである。この間、全長160mを超える登り窯や、石炭燃料を使うための高い煉瓦煙突、陶土をつくる水臼・水車などがつくられ、まちの景観を象徴する要素として現在もその面影を残している。
陶芸の里は一般に、水や木や土に恵まれた場所である。波佐見町を流れる河川には、いまも多くの多様な生物が生息している。しかもシーボルトがオランダに持ち帰った標本の近縁が指摘される、魚類がいまも生きている。自然の木の特性を知り尽くした職人による旧中央小学校講堂は、その内部空間の音響効果がきわめて高い。
これらの文化的で自然な要素を、包括して活かす方法が必要かもしれない。水力で陶土を作らなくなった川は、水害からの復旧時にコンクリートで固められ、水車は消えた。取り壊しの危機を乗り越え国の登録文化財になった講堂は、外部空間として周りの景観の中での価値を見出しそれに見合う対策が望まれる。中尾郷の長大な登り窯遺跡の活用は、これからの大きな課題であろう。
本ワークショップ/シンポジウムは波佐見町のさまざまな文化的・自然的資源を、包括してあつかうために、文化的景観の観点を取り入れて検討する。文化的景観は人々と自然との共同作業が生み出す景観である。そのような景観は、域外の人びとにとって魅力的な価値をもつ潜在力をもつ。陶芸の里の文化的景観としての、地域内外のさまざまなつながりを模索したい。

■第2日目プログラム（9:30～12:30）

■オープニング（9:30～9:50）
アトラクション　**波佐見児童合唱団(予定)**　顧問：井手敏彦　先生

■開会（9:50～10:00）
主催者挨拶　立　石　聰　（実行委員長）
来賓挨拶　一瀬　政太　氏（波佐見町長）（予定）

■基調講演（10:00～11:00）
**「文化的景観とまちづくり～土・木・水を考える」**
**山下　三平　氏（九州産業大学　教授）**

■パネルディスカッション（11:10～12:30）
**「波佐見の良さを再確認し、これからのまちづくりにどう活かすか？」**
◇コーディネーター◇　**山下　三平　氏（九州産業大学　教授）**
◇パネリスト◇　**大森洋子氏（久留米工大）、丸谷耕太氏（景観研究センター）**
**中野雄二氏（教育委員会）、馬場英男氏、石原正子氏、田﨑武詞氏**

■閉会（12:30）